

ソウ

野生のいぶき
湖国からアフリカへ
動物写真家 須藤一成

ソウの英名はエレファントだが、アフリカのジョナ語では日本語と同じ「ゾウ」である。ジンバブエのジョナ人のガイドに教えてもらった。遠く離れた日本とアフリカで同じ名前で呼んでいると言うのは不思議な感覚だ。

日本には、かつてユーラシア大陸と陸続きだった頃にゾウがいたが、2万年前ほど前に日本から姿を消した。今では化石が発見されなくなってしまったようだ。日本人におなじみの動物だ。

ゾウは巨大的な動物であるが、丸くわいらしい体つきや長い鼻、優しそうな目で多くの人を惹きつけている。

しかし、象牙を目的に殺されてきた歴史がある。ゾウを殺したり象牙を取ることが禁止されたりしている現在でも、鬱憤が後を絶たない。以前、象牙のないゾウを時折見かけて不思議に思った。後で分かったところだが、南アフリカの国立公園では、ゾウに麻酔をかけてあらかじめ牙を抜くという対策が実施されていたようだ。牙がないゾウは密猟されないからだ。ゾウを守るために、仕方がない選択とはいえ長い間迫害してきたにもかかわらず、普段はおつとりとして人を恐れる様子はない。

過ぎ去るのを待つことになる。ゾウは通せん坊していることが樂しいのか、ちょっと意地悪っぽくなつていつまでも食べるのでやめないと、心は通じている。途中に、1人の女性が立っていた。すぐそばにはゾウが立っている。スロープ上の女性が手が届きそうなどこに、ちょうどゾウの顎がある。お互いに立ち尽くして見合っている。どちらも動くこともやべることもないのだが、心は通じているように見えない。まるで恋人同士のようなのだ。そうすれば、やはり至近距離で、お互いが安心しなければならないだろう。お邪魔しないようにその場から遠ざかることは言つまでもない。

国立公園内では、道路であつても野生動物を横断する。ゾウはゆつたらと道路に出てくる。車が大きいので、道路脇にいるだけで車は通りがかった車は皆、手前で止まってゾウが

すどう・かずなり 1961年、京都府夜久野町(現福知山市)生まれ。イヌワシに魅せられ、滋賀を拠点に日本やアフリカで野生動物の撮影に取り組む。米原市在住。写真集「Golden Eagle イヌワシ」(平凡社)、DVD「ブラックイーグル」「ツキノワグマ」など。

車を家来にサバンナを堂々行進

巨漢でありながら優しさを感じさせるところがゾウの魅力だ

